ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18261105

モ腐サイコ100, モブ霊, エク霊, 霊幻総受け, 芹霊, モ腐サイコ小説100users入り

ヤクザパロの霊幻師匠総受け小説です。
みんな失踪した師匠が悪い、のかもしれない。

Table of Contents

詐欺師のスティグマ　1

金を貸していた社長がトんだ、と組長は茂夫に言った。
よくある話。ヤクザをしていたらよく聞く話だ。
連帯保証人をしていた愛人が切り捨てられて残ってる。だから捕まえて愛人に残された財産は巻き上げて、その一方で社長の行きそうなところを拷問して聞き出せ。そう言われることも珍しくは無い。
問題は。
その『社長』はエクボで。
その『愛人』が霊幻だと言うことだ。

……すっかりヤクザに染まっていた茂夫は、だいぶん肝も据わってきたと自負していたが、それでもまさか過ぎて貧血を起こして倒れるかと思った。

５年前。芹沢が高卒資格を取ったころ。
親戚からの紹介で、芹沢が愛知の自動車工場に勤めることになった。遠い県になるが、寮完備、給料は紹介ということでブランク無視の年齢相応の給料、その他の福利厚生も完備というかなりの好条件だった。
自然、霊とか相談所は辞めることになる。居心地が良く、恩義を感じていた相談所を離れることに芹沢は少し迷ったが、その背中を押さない霊幻では無かった。霊幻からも勧められ、芹沢は相談所を去った。コンスタントに除霊できる人間が居なくなることを少し心配に思い、茂夫やエクボに『お願いね』と言い残して、去った。

――いつでも戻れる、と信じて疑わず、去った。

茂夫も就職活動や大学生活で忙しかった。霊幻もそれらを応援してくれていた。エクボも、茂夫に協力的だった。『師匠をお願い』とエクボに言って。

２か月。

たった２か月で、２人は消えてしまった。

久しぶりに訪ねた相談所は貸テナントになっていて、しばらく茂夫はショックでドアの前から動けなかった。
前から気になっていたことはあった。
霊幻は
「お前ら俺に頼りすぎだろ」
「いい大人になってきたんだから、自立しろよ」
「わかってんだろ、いつまでこんな相談所に入り浸るつもりだ？」
と。
冗談めかして。でも、本気で心配して、茂夫や芹沢たちに言っていた。
大人になって、茂夫も理解していた。いくらバイト先とはいえ、何かあれば霊幻に相談するという生き方は、『甘えている』ことぐらい。なんとかしなければ、と思いつつも、これぐらいの甘えは許されてもいいのでは、とまだ残っている茂夫の子供の部分がささやいていた。

茂夫はまさかこんな形で、『卒業』させられるとは思っていなかった。

霊幻の携帯は解約済みで、足取りも追えなかった。
疎遠になっていたトメも、話をきいて一緒に探してくれた。

なんの手がかりも、見つからなかった。

霊幻だけならともかく、本気で失踪するつもりのエクボも一緒なのである。教祖をやっていたエクボを本気で匿う元信者もいるだろうし、人生（？）経験の差も大きい。

次第に茂夫も芹沢たちも、霊幻とエクボを探すことを、諦めはじめた。

それぞれの生活もある。人生もある。それぞれが散らばって生活に戻っていき始めた時──。

ひずみが、出来ていった。
各人の、人生に。

おそらくこれは、霊幻が予想していなかったことだ。
霊幻の存在というのは、親戚の叔父さんのようなもの。そう霊幻自身は思っていた。
子供の時は良く遊んでもらったかも知れないが、大人になったら自然と疎遠になるような、そんな存在。
いや、そんな存在でないといけないと思っていた。赤の他人に依存し過ぎるのは、良くない。茂夫から霊幻へもそうだが、霊幻から茂夫へも、そうだ。

だから、潮時だと思ったのだろう。茂夫が私生活が充実し、芹沢が就職した。丁度いいタイミングだと思ったのだろう。
消えるならこんな夜に。どこか達成感とともに、エクボと共に、そんなことを思ったかも知れない。
新しい商売をしたい、と霊幻が言ったら、エクボは驚くほどあっさり『俺様も手伝ってやる』と言った。茂夫たちから失踪するつもりだ、という言葉に、驚くことに、『俺様も付き合ってやる』と同意した。そして理由を尋ねたら、これまたあっさりと、霊幻への恋愛感情を告白してきた。
そこでわりと『アリ』で、霊幻は自分がバイなことに気付いたのは、また別の話。
付き合うかどうかは当時は別にして、2人はそうやって駆け落ちするようにして失踪した。

霊幻は思わなかった。

エクボからそういう感情を向けられているのなら、『他』からは？

そう思う、ベキだった。

自覚していなかった『彼ら』は、喪失感の意味も分からず、少しずつ精神を病み、少しずつ人生を狂わせて行った。

気が付けばみんなヤクザの関係者である。
霊幻に言えないような、ことをする様になってしまった。どうせとがめてくれる人はいない、から。

そんな彼らの目に、あの２文字が入ってしまった。

エクボの『愛人』をしていた、霊幻。

愛人。

つまり、肉体関係がある。

つまりつまりつまり、霊幻とは、そう言うことが、できてしまう。

気付いてしまった。

（そうか僕（オレ）は）

（──好き、だったのか）

続